

第5節 佐藤文彦先生との出会い

1 佐藤先生ならどうされるだろうか

私の教職のスタートは、私の出身中学校である吉野中学校の学習会専任指導員であった。志を持って教職に就いた自分であったが、理想と現実は大きく違う。

そのギャップに焦りさえ感じていたとき、同和教育の講演を聞くことになる。それが佐藤文彦先生の講演であった。また、その会場は板野中学校の体育館であり、そのことに何か人生の出会いの不思議を感じる。私は、その講演の冒頭の言葉に引き込まれ、身体が熱くしながら話を聞かせていただいた。

その講演の冒頭の言葉は「悲しみが見えなくて幸せになれるでしょうか」であった。そんな問いかけに佐藤先生はご自身の生きざまを語られ、様々な思いを私に残していただいたのである。そして、翌年私は藍住中学校で勤務することになり、そこで出会った石原佳和先生を通して、佐藤先生が主宰されていた佐藤塾に参加させていただくようになった。

佐藤先生との出会いは、私自身の人生において同和教育に目覚めていく大きな出会いとなっているが、佐藤先生の「倒れることが恥ずかしいのではない。倒れても立ち上がるうとしないことが恥ずかしいのだ。倒れたら立ち上がればよい。その倒れ方が大きければ大きいほど、倒れたことを大きなバネとして大きく立ち上がる。そのことを私は差別の中を解放を求めてひたむきに生き続ける人たちから学んだ」という言葉に象徴されるように、私の毎日の暮らしにおいて、今も佐藤先生の言葉が、生活のいろいろな場面で思い出されてくる。いろいろな問題に直面したときいつも思う。それは佐藤先生ならどうされるだろうかということである。

2 同和教育は日常が問われている

私は鳴門市瀬戸中学校に赴任した1987年4月から2年間、瀬戸町内の3小学校と瀬戸中学校とが道徳教育協同推進校として文部省（現・文部科学省）の指定を受け、道徳教育の研究推進にかかる機会を与えられる。

特に私は道徳教育主任として、まず私が道徳学習の授業研究に取り組んだのであるが、そのときに行った授業が、佐藤先生よりご指導をいただいた資料『瀬戸のかじこ』の学習であった。

その授業では生徒一人一人の生活に関わって、資料『瀬戸のかじこ』に寄せる一人一人の思いが語られ、生徒一人一人が自己の生き方を問う学習となっていく。それは佐藤先生から学んだ思いを瀬戸中学校の一人一人の生徒に問い合わせた授業であった。

その授業記録は、そのときの生徒たちの精一杯の思いが語られた記録であり、後に授業記録をまとめていく原点がそこにある授業と言えるが、私はその授業記録を佐藤先生に読んでいただけたことが大きなよろこびであった。

佐藤先生は、いつも私を丸ごと包み込むように思いつきり認めていただき、いつしか私は、佐藤先生の大いなる力に生かされている自分を自覚するようになる。この資料『瀬戸のかじこ』の授業記録についてもそうであった。

佐藤先生は、佐藤塾の資料として私が実践した『瀬戸のかじこ』の授業記録を取り上げられ、「森口先生の授業記録、森口先生の願いや子どもたちの思いをより強く受けとめたかったから、私の手で書いてみました」と言われ、先生自身の確かな筆跡で、その授業記録を整理され資料として出された。

佐藤先生は私を励ますように、私の思いを受けとめていただき、人間として生きる指針を示していただいたことが、今の自分を支えている。私は佐藤先生に生かされながら、日々の教育実践に自分のすべてをぶつけているように思う。

佐藤先生は、私が瀬戸中学校で初めて『瀬戸のかじこ』の授業をした翌年の1988年1月30日にご逝去された。年明けに入院されたということを聞き、しばらくしてから大変厳しい状況だということを聞かされていた。佐藤先生が『瀬戸のかじこ』の授業記録を書き写してくださったとき、死期が近づいておられるということを知っておられたのだろうか。様々な思いがこみ上げてくる。

私は佐藤先生が亡くなられる5日前、1月25日にお見舞いに行った。「昼間は40°C近くの熱が出てるんですけど、今は熱は下がっている」と言われ、10分程話を聞かせていただいた。

佐藤先生はそのときも、私のクラスの生徒のことを聞いてくださった。私はそのとき、佐藤先生が阿波中学校で講演をされた録音テープをおこし、その講演記録を資料として取り組んでいる道徳学習のことを報告した。そして、佐藤先生の思いが一人一人の生徒の中に広がっている道徳学習の感動を口にしたとき、佐藤先生は、穏やかに私を包み込みように語ってくれた。

「私の資料がどうこうじゃない。子どもたちとの関係なんです。教育は日常です。同和教育は日常が問われているんです。先生がつくられている子どもたちとの日常がすばらしいから子どもたちを輝かせていく授業になるんです。」

3 教育とは互いへの信頼と尊敬から築かれる営み

そのときも、見舞った私の心が洗われ、豊かなものがわき起こってくる時間を共有させていただいた。そして、私に生きる力を与えてくれるように、「先生の教室は、教育という世界を超越しています。教育とは互いへの信頼と尊敬です。本当の教育とは、互いの存在を信頼し、尊敬し合う関係が築かれていますね」と見舞った私を励ましてくださる。

見舞いにきた私は逆に励まされ、この感動を明日早くクラスの生徒たちに伝えたいという思いに包まれて病室を後にした。「人間はどこまで美しくなれるのだろうか」とつくづく思う。

帰りのエレベーターの中で熱いものがこみ上げ、胸がいっぱいになっていたことが鮮やかに思い出される。佐藤先生との最後の時間を過ごした1988年1月25日は、どんなことがあっても忘れないことはない。

私は、佐藤先生の講演記録であるその資料に、1988年元日にいただいた佐藤先生からの最後の年賀状に記されていた『美しさを求めて生きる人生を』という言葉をタイトルにつけさせていただいたが、私は今も、この『美しさを求めて生きる人生を』という言葉の意味を求めて、一人一人の生徒に自己を語り、自らのすべてをぶつけている。まさに私の原点はここにある。その資料を引用させていただくことにする。

美しさを求めて生きる人生を

1 倒れ方が大きい程、大きなバネとなって立ち上がる

少年の頃の話をする。人には皆少年の頃がある。今の私にとって少年の頃は何であったかと思うことがある。何か困難にぶつかった時に、すぐ少年の頃を思い出す。その思い出が困難を乗り越えるエネルギーになる。またエネルギーになってきた。たとえば、困難にぶつかって、ずっこけるそして倒れる。その倒れ方が大きければ大きい程、跳ね起きる力も大きい。倒れ方が大きい程、大きなバネとなって、大きく立ち上がることができた。部落問題に取り組むようになったのもそうであった。この世の中で、正しいことを貫いていくためには、間違いと闘っていかなければならない。決して間違いにはついていかない。たった一人になっても、間違いにはついていかないという抵抗の精神がいる。

小学校6年の頃であった。夕食の時に母は私に言った。「今夜は、弟二人にしか食べさせることができない。それだけのご飯しかない。」非常に貧しくて、その晩のお米がなかった。やがて、弟二人が遊び疲れて帰って来て「ご飯…」と言った。食卓には二人分のご飯しか置いてない。二人の弟が言った。「お母ちゃんとお兄ちゃんは食べるの？」と言うから、小学校6年の長男である私は、とっさに、「先に済んだよ、二人で全部お食べ」と言った。腹を空かして帰ってきた弟たちのおいしそうに食べる姿をみた時、私は自分の空腹に打ち勝つことができた心地よさをしみじみ味わった。自分のことより、人のことが先にということが、どんなに私を満足させてくれるものであるかを知った。

また、ある夜の食卓に、母が魚の煮付けを出してくれた。30センチぐらいの魚で四角に切って、頭の方が私、尻尾の方が弟。私はあまり魚が好きでなかった。その上、頭の方がおいしいという人もいるが、魚ぎらいの私には、頭の方は食べるところがあまりない。尻尾の方が欲しかった。ところが、母は弟の方を向いて、「頭の方は、お兄ちゃんだ。お兄ちゃんは頭の方だ。おまえたちは弟だから尻尾の方だ。」そう言った。弟たちは、身のたくさんある尻尾の方を喜んで、おいしそうに食べていた。やがて、その弟たちが大人になった時、もちろん、私も大人になっている。そのとき、弟たちが少年の頃を思い出して言った。『あなたは弟だから』そんな言い方で、おいしい尻尾の方を私たちにくれた。いつも、そうであった母の教育が、私たち兄弟を他人から見ると、とても羨ましい仲のよい兄弟にしてくれた。また、そんな母の教育が、兄弟仲よく助け合っていく生き方をさせてくれた。今も、亡くなつて25年になる母に、私は感謝している。

2 同和教育は生命

私が、同和教育に必死になつて取り組むようになった原因は、一人の教え子が差別によって殺されたからだ。それはもう20年も前のことだ。ある夜、一人の教え子が私の家を尋ねてきた。彼は結婚して間もない頃だったので、しょんぼりしてやってきた。そして、私に「先生、私は中学校の頃、いい生徒でしたか。悪い生徒でしたか」と尋ねる。その子は、友だちが「先生、あのなあ…」と言って私のところへ擦り寄ってくる。そんなようすを黙ってニコニコしながら見ている。掃除の時は、みんなが掃除をしなくても黙って掃除を続けてきた。そんな子どもだった。

「君はよい子だったよ、君のしていたことは、眼を閉じると、今でも昨日のことのように思い出す」と答えると、彼は「ああ、そうですか」と力のない返事をしながら、静かに「ありがとうございました」と言って帰っていった。その教え子のようすが、心に引っ掛つてたまらない。そんな数日間を過ごした時、自殺したという報が私に入ってきた。結婚してしばらくたって、部落出身であることを暴かれ、生きる望みを失つて死んだということだった。私は「しまった！…」と思った。私がもう一言「どうしてなのか？」と聞いてさえいれば、死なずにすんだのではないかと思った。

また、もう一つ私がどうしても忘れることができないことは、その当時私は、その子とその子を取り巻くクラスの子どもたちに部落問題を語っていなかった。同和教育をしていなかつたことだ。私が同和教育をしていなかつたために、部落問題を語っていなかつたために一人の教え子の生命が奪われた。私が教え子を殺したんだという胸の痛みは、年ごとに大きくなつていった。このことがあってから『同和教育は生命なんだ』ということを思い知らされた。

少年の頃の日々、世の中に対する反抗心をむらむらと燃え上がらせて生きてきた私は、この教え子の死を境にして同和教育に取り組む決意をした。同和教育に取り組む決意をした私は、その後様々な理由をつけて、同和教育に反対する多くの人たちに出会つた。しかし、私は決して負けなかつた。部落差別が人間の生命にかかわる問題であることを胸の痛みとして知つてゐるから決して負けなかつた。私に同和教育反対などという人間によって、私の教え子が殺されたんだという怒りに震えて、私は徹底的にその人たちと闘つてきた。私は今まで大切な教え子たちに、部落差別と闘つて生きることを教えていなかつた。そのために教え子を死なせてしまった。私はそれ以後教え子と共に闘い、共に生きることを決意した。

3 足の裏にも知恵がある

これから難しい話をする。皆さんのが難しい話は聞いてくれないと考えることは、皆さんを尊敬することにならないから、あえてその話を優しくつくりかえない。私が話す言葉を頭でなく、身体で聞いてほしい。頭で考へてもわからない。身体全体を耳にして、身体全体を眼にして、心で聞いてほしい。それでもわからない時は身体に刻みつけてほしい。皆さんを信じるからこそ、尊敬するからこそ難しい話をする。

人間というものは様々な差別と向かい合つて、たとえ差別することがよくないと知つても、よくないと知る知恵で、さらに巧妙な差別を考え出す。なぜ人間はそんなことをするのか。それは人を差別することは、自分自身を差別することになることに気づいていないからだ。この世の中から、部落差別がなくなった時、より幸せになれるのは、差別される人か差別する人かどちらだろうか。私は差別する人こそ、より幸せになれると信じる。なぜなら、差別がなくなった時に、差別する人の中にある差別するという心の重荷がなくなるからだ。

私は差別の中を生きる人々と共に生き、共に学んできた中で、人を傷つけることによって、人を傷つける差別によって、実は自分の生命を縮め、自分の魂を傷つけていることに気づいた。そのことを一人の人間に例えて言う。頭で立っている人間も、頭で立っている私も、皆さんも、足に支え

られていることを知らなければならない。

頭で人は立つだろうか。ある夜、死にたいという苦しみを抱いて、相談に来た一人の若者がいた。そのとき、若者に尋ねた。

「死にたいと言っているのはどこか、どこが死にたいと言っているのか。」

そのとき、若者はポカーンとした表情で私を見た。そこで私は手で頭をたたきながら「死にたいと言っているのはここか」と尋ねたら若者はうなずいた。「頭の思いで死んだら、頭だけが死ぬか」とさらに続けて聞いた。

「頭だけの思いで死んだら手も死ぬでしょう。君は手に死んでもよいかと尋ねたか。」

「手だけではない、足にも相談しなくていいのですか。だいたい人間は頭でっかちだから、頭に近い顔の方ばかりを気にしている。」

「顔は、一日のうち何度も何度も気にして見る。だが、足の裏の方は、めったに見たことがない。足の裏を見る時は、水虫ができた時か、魚の目ができた時ぐらいだ。頭は足を無視している。しかし、足の裏は、全身の中で一番下で、主人にも感謝されないにもかかわらず、全身の重みを支えてくれている。」

「死ぬという一大事にいるのだから、せめて一度ぐらいは、足を見つめて感謝し、死んでもいいかと、了解を求めることぐらいしたらどうか。」

「足の裏を見つめ、足の裏よ。私は死にたいのだが、君は賛成か、反対かと聞いてみるんだ。」

足の裏が声を出して返事をしてくれることはない。しかし、足の裏にも知恵がある。それがなかったら、どうして主人に無視されながらも、全身の重みを支えて生きることができるだろうか。もし、足の裏が返事をしなかったら、それが聞こえるまで聞きなさい。それが人生なんだ。

つまり、頭の知恵だけで生きるのが人生ではなく、足の裏に気づき、足の裏に感謝できる本当の知恵を持つこと、それが人生なんだ。この話を、すぐに飲み込まないで、口にいっぱいいためて、どんな味がするか味わってみてほしい。

4 可哀想な人間にはなりたくない

私は小学校5年生の時、野球をしていて友だちと衝突して、右の足のお皿の下にある筋を切ってしまった。だから私は足は不自由です。小学校の5年生から師範学校を卒業するまで、9年間運動会が9回あった。運動会の度に徒競走があるので、今年はサボってやろう、今年はサボってやろうと毎年思っていた。しかし、私はいつも、ドッテンドッテンと足を引きずりながら、一番びりで多くの人の前で、長い時間私の身体をさらしながら生きてきた。9年間で9回の最後の運動会が終わった時「走り続けてよかった」とこの頭がこの足に感謝した。これで私は日本一のビリっこになれたと思った。私はこの頭の不注意のために足を傷つけてしまった。しかし、足は苦しいとも恥ずかしいとも言わないで、私の全身を支え私の頭を支えてくれた。そのことに気づかないこの頭は、かってに恥ずかしいと足を恨んだこと也有った。私の不自由な右足をかばうように、左足の太股は右足の太股の倍近くある。左足の太股の太さは、怪我をしてから53年間、右足をかばいながら左足が

生きて来た証拠である。

私は右足についてまた一つ悲しい思い出がある。怪我をしてからちょうど1年、小学校6年生の体育の時間、不自由な右足が、跳び箱に引っ掛け、右の手首を折ってしまった。父は心配して私を病院に連れて行ってくれた。ところがその翌朝、心配してくれた父が心臓麻痺で突然死んでしまった。私はあまりにも突然の父の死に、びっくりしてしまって涙も出なかった。父の通夜の晩、近所のおばさんが私の姿を見て「この子が怪我をしてお父さんがびっくりして死んだんやな」と言った。私はこの言葉を聞いた時、私が父を殺したんだと思った。その言葉を聞いた時いつぱんに悲しくなって、その夜はまんじりともせずに泣き明かした。

そして翌朝、すでに会葬場では、私たち母子を迎えてくれる会葬者の列ができていた。両側に並んでいる列の前を私は包帯で右手を吊り、左手で遺骨を抱いて歩き、母はその後、弟もその後にならんと通った。そのとき白いハンカチがちらちら見えた。白いハンカチで涙を押さえているおじさんやおばさんの「おお可哀相になあ」という声が聞こえた時私は胸を張った。「昨日は何を言った。あなたがおやじさんを殺したと言い、今日はまた可哀相やなあと言う。私は決して可哀相な人間にになりたくない」と思った。父の遺体を運ぶその日の朝、母が「お父さんが亡くなつて、私たちの家はお前が柱だ。お前が支えなんだ」と言った。その母の言葉を思い出して「なにが可哀相なんだ。可哀相な人間には絶対になりたくない」と思った。

5 この頭の中には私の母がいる

それから母子4人は、口には言えない苦労の道を歩むことになる。ここに証拠がある。私はずっとこの頭で通してきた。山の小学校に赴任した時も、最後に鴨島第一中学校に赴任した時も、私を知らない人はこの頭を見てニヤニヤする。私はそのとき理由を言う必要も、下を向く必要もない。山の小学校に校長で赴任した時、私が散髪すると子どもたちが「校長先生、きれいになった」と手をたたいて喜ぶ。なぜ頭の毛を短くするのか理由はない。こうしたいからしている。

私が通っていた門司の小学校は、児童数1200人を越えていた。その1200人の中で私だけが長い髪をしていた。それは父が元気な時「坊ちゃん、坊ちゃん」と言われ、女中さんが二人も、三人もいる豊かな贅沢な暮らしをしていた証拠が、私に1200人いる子どもの中に一人だけ長い髪をさせていた。しかし、父が死んだのを境に母親がバリカンで髪を切ってくれた。27歳の春まで母は私の髪を切ってくれた。だから、この頭の中には私の母がいる。私の父がいる。それを知らないで笑うものは笑え、人が笑ったからといって、ここにいる母や父を追い出したくはない。散髪にいく金がなかつた。家でバリカンで刈られるのは痛い。今もその痛さが懐かしい。

なぜそんな豊かな暮らし、いつぱんにそんなに貧しくなったのか。私の父が築いてきた家、父はバナナの問屋をしていた。台湾から仕入れてきたバナナを九州から北海道まで売り捌いていた。しかし、父の死を境にして、33歳の母を女と思って、馬鹿にして男たちが何人も寄つてたかって、父の店を乗つ取つてしまった。その乗つ取つた男たちの策謀に抵抗するため、母は父が死んで49日も経たないのに、私たちの暮らしを守るために、その男と父の位牌の前で大喧嘩をした。しかし、

ついに乗っ取られてしまった。私は働かなければならなくなつた。父が元気な時、私の顔を見て「なあ、坊ちゃん」と言っていた男たちが、父が死んで店と家が乗っ取られると「このガキ」と言った。「坊ちゃんという言葉は、私という人間に対して言ったのではなかった。お金のためか。」

私ははっきりわかつた。私は母が大喧嘩をしているのを階段の下でずっと聞いていて「ようし、敵を取ってやる」と思った。

学校はよく休み成績は落ちた。門司のところから海を渡れば下関がある。そこに市場がある。私たち親子は小さな果物の店をしていくために、売る果物を小学校6年生の私が、朝暗いうちに海を渡って仕入れてきては店において学校へ行った。母が体が弱かったため、どうしても学校を休まなければ店番ができない日もあった。食べるものが無い時もあった。そんな私を見て母は「すまんな」と言った。私は母が心配してくれるその気持ちがよくわかつたから「僕はもう中学校（旧制中学校）へ行くのはやめるから」と言った。楽しみにしていた中学校への進学をやめて、高等小学校の2年間の道を選んだ。

そんな私を見て、母は「中学校へ行かないのだから、しっかり勉強しなよ」と言って、私に大人たち、青年たちが、私の通う小学校で夜、勉強している夜学へ行かせてくれた。寒いある夜、母は乏しい母の財布の中から、お金を出して「おなかが空くだろうから、帰りに焼き芋でも食べて帰り」と言ってお金をくれた。私はその夜の帰り焼き芋を買って弟たちに食べさせようと思って、懷に焼き芋をいれ走って帰った。

6 貧乏が恥ずかしいのか、貧乏を恥ずかしがることが恥ずかしいのか

学校を休むことが多くなつた。豊かな家で長い髪にしていた頃の友だちは、勉強がよくできる子、家がお金持の子だけだったが、私の生活が苦しく貧しくなつてくると、貧しい家の子、勉強が遅れている子、いつも先生に怒られて立たされている子が私の友だちになつた。私は小さい頃から、家が貧乏で先生からよく叱られる子どもたちの中に、本当の人間らしさがあることを身をもつて知つた。

家の仕事のために学校を休むことが多かつた。それは仕方のないことだった。しかし、月に一回だけその日が学校にいける日であるにもかかわらず、どうしても行きたくない日があった。それは学校へお金を持っていかなければならぬ日だった。行きたくなくても休むわけにはいかない。前の日の夜、私は何と言ひ訳しようかと苦しかつた。私はいつも「忘れました」と言い訳した。一番うまい返答だった。そう言つたら友だちが横で「お前、ようわっせるのお」と言い出し、また「今度も忘れるんだろう」とも言つた。けれども先生は一言もそんなことは言わなかつた。そして何ヶ月か後の放課後、私を呼んで言った。「貧乏が恥ずかしいのか。貧乏を恥ずかしがることが恥ずかしいのか」と聞いた。「貧乏が恥ずかしいのではない。貧乏を恥ずかしがることが恥ずかしいのだ。お前の母さんはどうやって生きてきたのか」と言って、こんこんと私に話をしてくれた。

ある日のこと、母が夜寝ずに作ってくれた手製のズボンをはいて学校へ行った。もちろん格好は悪い。小学校6年のクラスの子どもが笑つた。私は腹が立つたまらないでその友だちを殴りとば

した。私は63年間の長い人生の中で、人を殴ったのはそれが最初で最後であった。殴って殴って殴り倒した。いくら殴っても私の心は晴れなかった。ふと気がつくとたくさんの友だちが、ぐるっと私を取り囲んで冷たい目で私をじろっと見た。そのとき私はいっぺんに身体中の血が抜けてしまった。それがどうしてなのかわからなかった。

教師になって、部落問題を勉強し水平社宣言を学んだ時、そのことが初めてわかった。自分が人を傷つけようとしたって、人は傷つけられることはない。人が私を傷つけても私は傷つかない。このことが今までわからなかった。貧乏が恥ずかしいと考えていた私が、いくらお前は貧乏だと言われて馬鹿にされても、私はそのことによって、傷つけられることはないのだということを教えてくれたのは、部落問題の学習だった。差別の中を胸張って生きる人々の姿だった。水平社宣言だった。

7 100人のうち99人走っても、たった一人お前は走るな

小学校6年生の先生は酒井虎蔵と言った。その先生が小学校を卒業する時「100人のうち99人走っても、たった一人お前は走るなよ」と言られた。その言葉を胸に私は小学校を卒業した。その言葉を心の支えにして、私は一生懸命今まで生きてきた。小学校6年生から半分ぐらいの人が中学校に行く。私は高等小学校にいった。私の高等小学校の仲間が「ほれ見てみい。中学校にいっている人間は偉そうにしている。帰りに待ち伏せてやったろうか」という声が聞こえた。私は止めた。「情けないことをするな、相手を待ち伏せて殴って、自分が傷つくということに気がつかんのか。」私は必死に止めた。友だちは私の言ふことをわかつてくれて、そのことはしなかった。

高等1年生の時の先生は滝本章夫という先生だった。私が先生になろうと思ったのは、その先生との別れの時だった。いろいろと事情があって、母親の里の徳島へ帰るようになった。母が先生に「お世話になりました。徳島の鴨島へ帰ります」と別れを告げた時、先生は私の母にこう言った。「おかあさん、私には子どもがないのでよかつたら、この子を預からせてもらえませんか。うちで預かって、この子を先生にしたらどうですか」と言ってくれた。私の母がそんなことをすることはなかった。けれども、そんなことを言ってくれた先生の温かい心は、決して忘れることができない。私はその先生の言葉を大事にして、自分が先生になる決心をしたように思う。

8 部落に生まれたことを恥ずかしがって、親を傷つけてはいけない

私たち兄弟は、母子家庭で貧しい暮らしにあるということで、世間から冷たい目で見られるということが度々あった。その度に母は、世間の冷たい仕打に傷つきながらも、羽を広げて私たちを守ってくれた。そんな姿を見た時、私は母を虐めるような人間は絶対に許さないと思った。

私は私の教え子、部落出身の教え子たちに、私が持ってきた私の母に対する思いを言い続けてきた。部落に生まれたことを恥ずかしがって、親を傷つけてはいけないということを私は、必死の思いで言い続けてきた。「私がしてきた苦労と、部落に生まれた君たちのお父さんやお母さん、おじいさん、おばあさんがしてきた苦労を比べたら、月とスッポンぐらいの差がある。私が母子家庭と貧しさの中で育って苦しい思いをしてきた。その何十倍もの苦しみを背負って、君たちを育ててきた

ことを忘れるな」と言って子どもたちを励ました。

私は世間を憎みながら、世間に反抗しながら生きてきたのだが、やけを起こさなかった。なぜか
と言うと、それは先生の温かい教えがあったからだ。それにもう一つ、父が生存中大事にしてきた貧しい人々の優しさに支えられたからだ。父は本当に心優しい人だった。バナナは店先で売るやり方と、天秤棒を担いで売り歩くやり方と二つあった。天秤棒を担いで売る人は貧しい人が多い。バナナを買いに来ても、付け根のところが黒くなつて、ボロッと落ちる一番おいしいバナナ、けれども商品としては安い。そんなバナナを買っては町を売り歩く。そのおじさんやおばさんたちに対して、父は「お金はいつでもいいよ」と言っていた。私が店へ遊びにいくと、父はまだ物事のわからないような私を呼んで、「神様はみすぼらしい姿に形を変えて、人間をためしにくるんぞ」と言って、私によく話を聞かせてくれた。その貧しい暮らしの中に生きる人々は、父が死んだ時、真っ先に私たちのところへ来てくれて、お父さんが生きておった時に借りたお金は、まだわずかしか返すことができないと頭を下げ、いろんなものを持ってきて私たちを励まし支えてくれた。お金のある人はもっとお金を増やそうと思って、母が一人でやっていこうとする店を乗つ取ってしまった。貧しい人々は「すまん」と言って「ささやかですが…」と言って、私たち親子に食べ物を持ってきてくれた。私は冷たい世間を憎み世間に反抗しながらも、やけを起こさなかったのは、貧しい人々の温かさがあったからだと心から感謝している。

9 世の中の間違いと闘うことを自分の生きる証として

私は人を差別するような人間にはなりたくない。そのためにはどのような生き方をすればよいのか。私が不自由な右足と生きてきたように、差別の中を生きる人々と共に、苦しみながら生きることが、私の生きる道だと思った。

鴨島第一中学校にいた時、部落差別の様々な苦しみ悲しみにあえいでいる子どもを見て、何とか代わってやりたいと思った。しかし、私が代わってやることはできない。それならば私の残された道は、その子どもたちや親たちといっしょに苦しみながら生きていくことしかない。私は曲りなりにも、今まで人間らしく生きたいということを目標に生きてこれた。それは世の中の間違いと闘うことを自分の生きる証としてきたからだ。そんな暮らしの中で独りぼっちになったこともあった。そのときしょげ返って、その独りぼっちの孤独感にあえいでいた時、亡くなった母がこう言った。「独りぼっちになることが嫌だったらやめ。やめたらいいでないか」と母が言って、その次に「独りぼっちになっているということは、お前が真実の道を生きているという証拠でないか」と言って、私を叱りつけてくれたこともあった。

私は人間らしく生きる。間違いを正しながら生きる。たった一人になつてもその生き方の方がいい、そんな生き方がしたい。これが私の同和教育の「よろこび」である。

(1984年11月・阿波中学校での講演記録より)

もう一つ、佐藤先生に関わる資料として、佐藤先生が最後に勤められた鴨島第一中学校の卒業式で語られた『卒業生へのはなむけの言葉』(式辞)がある。

高校野球において池田高校が、甲子園で大活躍した時、江上光治選手（早稲田大学・日本生命で活躍する）がいたが、江上選手は、鴨島第一中学校野球部のキャプテンであり生徒会長だった。

江上選手に代表される生徒たちに、佐藤先生は人間としての生き方を追究していく同和教育を日常的に実践されている。そんな鴨島第一中学校の教育の確かさを実感する一つに、江上選手が中学3年の時、鴨島第一中学校野球部が県大会、四国大会と優勝し、全国大会に出場したときの選手宣誓の内容を上げることができる。

当時、全国大会は、横浜スタジアムで行われるが、そのときに四国代表の鴨島第一中学校が選手宣誓をすることになる。その選手宣誓はキャプテンであった江上選手が堂々と行っている。それは、当時の大会参加者や関係者の心を大きく揺さぶるものであった。

その選手宣誓の内容は、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と結んだ水平社宣言の思想そのものであり、人間らしい力をつけ、全国の仲間と手を握り、連帯して幸せな社会の実現していく人間教育としての同和教育のあり方や「よろこび」を高らかに唱い上げている。そして、その選手宣誓文は、当時同和教育が根づいていない神奈川県の新聞社は、その宣言文を「ユニークな内容」として、その全文を新聞紙面に掲載している。

1980年8月、地元神奈川新聞に全文掲載された宣言文は、以下のような内容であった。

『宣誓、我々選手一同は、大会の主旨にのっとり、中学生らしく誠実に試合をし、お互いの友情の絆を深めることを誓います。

なお、私たちは今まで勉強と野球を両立させることを通して、人間らしい力をつけようと懸命に努力を重ねてきました。

本日、ここに結集した全国の仲間と共に手を握り、連帯して幸せな社会の実現を目指し、生き抜くことを決意しております。』

佐藤先生が展開された鴨島第一中学校における人間教育としての同和教育の確かさは、この江上選手が堂々とやり遂げた選手宣言に象徴される。

私は、佐藤先生に幾度となく「教育は日常ですよ。同和教育は日常そのものが問われているんですよ」という言葉を語っていただいている。

今も目を閉じると佐藤先生の声が聞こえているが、教育とは、生徒一人一人の中に、いつまでも主体的に生きてはたらくものを残していく営みだと考える。

最後に、鴨島第一中学校の人間教育としての同和教育の締め括りとして、佐藤先生が卒業式で語られた『卒業生へのはなむけの言葉』(式辞)を引用させていただく。それはまさに日常の共感的つながりがあってこそ、教育は教育として機能していくことを訴えられた佐藤先生のメッセージである。佐藤先生の語り、その言葉の意味を噛みしめながら、人間としての生き方を求め、生徒一人一人との豊かな日常を築き続けていきたいと考える。

卒業生へのはなむけの言葉

ふと上を向いたら梅の花が咲いていました。夕闇にその小さな白さがとても新鮮でした。忙しさの中で、花がいつ開いたのかも気がつかぬこの頃でしたが、白い梅の花は紛れもない春の訪れを感じさせます。

もうすぐそこまでやってきている春を肌で感じながら、私は私にとっても卒業生の君たちにとつても厳しい冬の時代があったことを思い出しております。

ただ今卒業証書をお渡しました254名の皆さん、鴨島第一中学第28回の栄えある卒業生となりました。君たちの今日の日を1番喜んで下さっている保護者の方々と、君たちに大きな期待をよせ、その幸せを願ってくださっている来賓の方々にお越しを頂いて、ここに卒業式を挙げることのできまことを誠にうれしく存じます。

振り返ってみると、この3年間、空の青さや自然の変化に心を止めるなどを私は忘れてしまっていたようです。

52年の4月、皆さんと入学を同時にしました。私も鴨島第一中学校にやってきました。皆さんも入学してきました。共に新しくやってきた皆さんと私は、その思いを同じくするものがあったのか、何かしらん心が通い合い、気安く言葉を掛け合い、この3年間を過ごしてきたように思えるのです。

元気いっぱいの1年生の頃、いたずらをしている君たちを見つけて怒ってやろうと近づいたら、明るい声で「先生、こんにちは」と先手を打たれて怒ることもできず、吹き出してしまったこともあります。それは今でも爽やかな暖かい思い出として、私の心に生きています。あの時の彼は今どの誰であったのか思い出すこともできませんけども、そんな君たちと3年間、馬車馬のように前だけ見て暮らしてきた私でした。前を見ることだけしかできなかったこんな私の人間的な狭さが、君たちにどんな窮屈な思いをさせたことか。すまない気持ちでいっぱいです。

君たちが1年生の時、初めて少年自然の家の宿泊訓練が始まりました。その日は大雨にみまわされて予定は全て変更されましたが、それでも懸命に励む君たちを見て可哀想に思いました。明日天気になれと祈りましたが、次の日もまた雨でした。それでも竹とんぼ作りに指を紫色に染め、ミニ風作りに熱中する君たちには頭が下がりました。雨が降ったからと言って、天に向かってぶつぶつ言いまい。雨の日には雨の日の生き方がある。そう言って私を慰めてくれるのです。

そういう君たちの生き方がたまらなく好きで、深い感動を覚えました。それが君たちに対する私の大きな期待へと発展していたような気がします。自然の家の加藤先生は、すばらしい生徒達だったと次のような言葉を贈ってくれました。

「さようなら、好ましき少年たちよ。胸を張り瞳を輝かせて、明るくやり抜く生徒集団。行きずりの挨拶の暖かさ。全身にみなぎるファイト。素敵な少年たちの集団。私はこの集団がたまらなく好きだ。さようなら、鴨島一中。さようなら、さわやかな集団！」

雨が避けられないとすると、その雨を両手で受ける以外にありません。そしてその雨のおかげで、こんな日になったんだというような日をつくりだす。それ以外に道はありません。

人生には、例え親と子であろうとも、変わってやることのできない「荷」というものがあるので

す。私だって、君たちに変わって「荷」を担ぐことはできないが、君たちにその「荷」を担ぐ力をつけてやらねばと思って、今までやってきました。その「荷」が重いからといって、ぶつぶつ言るのはやめなさい。悲しいからといって泣いても、苦しいからといってわめいても、「荷」は軽くならないばかりか、ますます重くなつて君たちを苦しめます。自分の「荷」は自分で背負つて生きていく覚悟をきちんと決めねばなりません。どんなに重くとも、自分の「荷」は自分で背負つて歩くんです。

私は子どもの頃、右の足の怪我がもとで足が不自由になつてしましました。それからというもの、私にとって、秋の運動会ぐらいつらい行事はありませんでした。多くの人たちが見守る中を友だちから何十メートルも遅れて、どってんどってんと走らなくてはならないつらさは、何とも例えようがありませんでした。頭が痛いと言って休もうか、お腹が痛いと言って休もうかと、運動会の度ごとに悩みました。けれども、私は足を引きずりながらも、毎年の運動会を走り続けました。そして考えた。ビリはビリでも一番よりすばらしいビリはないだろうかと…。自分はどうてい一番にはなれっこないが、日本一のビリッ子になってやろうと…、そんなことも考えました。ピッコだからといって、ビリッ子だからといってぶつぶつ言うまい。ビリッ子にはビリッ子の生き方がある。ビリッ子はビリッ子であることを避けようしたり、ごまかそうしたり、そんな生き方はしない。雨の日には雨の日の生き方があるように、私には私であることの上に生きる生き方がある。それからの私は、私にとってのマイナスをプラスに変える生き方をつくることに必死になってきました。

そんなある日、「貧しき人々の群」という本が目にとまりました。

【先生、先生

何度倒れるまで

起き上らねばなりませんか？

7度までですか？」

という、弟子の問い合わせに対して答えた。

「いや、7を70乗した程倒れても

なおお前は起き上らねばならぬ」

と答えました。

すると弟子は先生の言葉に必死でまた立ち上がるのでした。

そして、このように語るのであります。

第一、先ず倒れ得る者は強うございます。

倒れるところまで、グングンと行きぬける力を、私はどんなに立派な、また有難いものだと思っていることでございましょう。

今度倒れたら、今度こそ、もうこれっきり死んでしまうかもしれない。

が、行かずにはいられない。行かずにはすまされない心が、私にはございます。

ほんとうにドシドシと、

ほんとうにドシドシドシドシと、眞の「自分の足」で歩き、眞の「自分の体」で倒れ、また自ら起き上られる者の偉さは、限りなく畏るべきものではございますまい。

まだ、心の練れていない、臆病な私は、もしや自分が、万一倒れるかもしれないことを怖がって、1尺の歩幅で行くところを、8寸にも7寸にも縮めて、ウジウジと意気地なく、探り足をしいしい歩きはしないかということを、どれ位恐れているでございましょう。

今の私にとっては、決して心の躍るような嬉しいものではありません。

けれどもどうでも歩き廻らずにはいられない何かが、自分の^{うち}裡の中に生きているのでございます。たとえ、いかほど笑われようが、くさされようが、私は私の道を、ただ一生懸命に、命の限り進んで行くほかないでのございます。

自分の小さなことと自分の弱いことに、いつもいつも苦しんでばかりいる私は、いったい何度倒れなければならないのか？

それは解からないことでございます。

けれども、私はどうぞして倒れ得る者になりとうございます。たとえどんなに傷はついても、また何かつかんで起き上り、あの広い、あのきわまりない大空を仰いで、心から微笑できましたとき！
【その時こそどうぞ先生も、御一緒に心からうなずいて下さいませ。】

私はこの序文が大好きです。私だって自信を失いそうになる時があります。そんな時かならずこの序文を思い出すことにしているのです。そして、失敗の中からこそ、新しい力が生み出されていくのだということがよく分かりました。

私は君たちに、自分の幸せだけを求める生き方は教えてはいません。この3カ年の中には、挫けつまづこうとした人もいました。挫折感に埋没して悲しむ人もいました。失望といらだちの中で逃避という道を選ぼうとした人もいました。

けれど、そんな時、共に寄り添って、苦しみながら歩いてくれた友が、いつもいてくれたではありませんか。全く自分のことしか考えられない受験勉強の最中でも、君たちは友を労り励まし合い、卒業の今日のこの日まで明るさを保ち続けてきました。なんとすばらしいことでしょう。

ここに並ぶ254名の卒業生の一人一人の顔に人間としての誇りが、光り輝いているわけを多くの皆さんに知っていただきたいのです。

私のすばらしい卒業生たち、目を大きく開きなさい。どうしたらみんなが明るく豊かに生きていけることができるのか。私もあなたたちに負けないように学び続けるつもりです。

そして、いつの日か、先生と生徒としてではなく、同じ幸せを願う仲間として、腕を組み合う日の来るることを楽しみにしております。

君たちが2年生になった年、一中は郡陸7連勝を遂げました。そして、今年は完全8連勝。この2つの優勝の蔭には、君たちがエネルギーとなってまとめ上げた大きな推進力がありました。

7連勝のうれしさいっぱいに抱えて、九州に旅立ちました。修学旅行で見せてもらった君たちの姿のすばらしさに、私は心の中で万歳を叫びました。

『はるばると讃められに行け九州路』

私の想いをよく分かって頑張ってくれた君たちに、改めて『はるばると讃められてきた九州路』という言葉を贈りました。ここにいる2年生が美しい友情の花を九州路に咲かせてきたのも、卒業生の蒔いた種が立派だったからです。

昨年の2月23日、当時生徒会役員であった君たちが、取り組んでくれた第1回の人権集会はいつまでも私の胸の中にうごめいて、ほのぼのとした人間の温かさが突き上てくるのです。まぶしいばかりの姿で卒業していった2人の先輩は、かつては泥にまみれ傷つき絶望という2文字のために、この世に生きているのかと悲しみに暮れたこともありました。

この2人の先輩が、黒崎学級（障害児学級）の一員であるという自覚に目覚めた時、黒崎学級の一員となりえた時、初めて全校生徒の前でものが言えましたと、私に言い残して、胸を張り張り巣立っていました。劇的とも言える感動の中から、皆さん一人一人の中に人間への目覚めが、このとき波立ち始めました。

君たちが主役となってやり遂げた去年の卒業式『明日に向かって』が、その主役を2年生に受け継がれ、『明日をめざして飛び立つ時を』今待っております。静かな装いの中にも若い激しい熱気が私には伝わって来るんです。一中祭といい、PTAの人権集会への取り組みといい、すべて君たちが学校の軸となってくれました。39年という私の教員生活の中でこれほど充実し、これほど感激に満ちた年があったでしょうか。私にとってはまさしく今年の1年という言葉がぴったりします。

私は今、君たちといっしょにやるだけのことはやった思いです。君たちの去っていった今夜、私はゆっくり思い出に浸ろうと思います。楽しい思い出を噛みしめ、過ぎ去っていく日々の寂しさに、枕を涙でぬらすかも知れません。しかし、明日、窓いっぱいに朝日がきらめく明日の夜明けには、残された在校生と共に新しい課題に向かって第一歩を踏み出します。

私と君たちの出会いは、私が一中へ来たとき、君たちも一中に入学してきた。それだけの事。ただそれだけのことが、今はもうただそれだけのことではなくなつた。君たちと過ごした3カ年、私は大きく変わり、君たちはすばらしく変わつた。君たちとの別れの今、出会いという大きな深い意味をしみじみと噛みしめている。私の若い時は、子どもたちとの別れが悲しくて、卒業式を心で泣きました。今の私は、君たちの生きていく世界がみて苦しいのです。どんな苦しみの中をこの子たちは生きて行かねばならないのか。それにしても力をつけなさ過ぎたと思います。

卒業生たちの門出にあたり、保護者の皆様に一言、お礼やらお詫びを申し上げたいのです。皆さんの子どもさんがいて、教えることができて、それが私の生きがいでした。そのことで私は十分報われました。子どもたちがなんのお礼を言ってくれなくても、私はこの生徒を教えることによって、自分の生活があったのです。私という人間のこの世にいた印になり、この世にいた意味にもなりました。自分の努力は生徒たちによって報いられた思いがします。本当にありがとうございました。

私は子どもたちにとって重荷になるような教師にはなりとうございません。子どもたちは私と勉強した間につけることができた力で、力一杯自分の人生を生きていくと信じています。それをさえしてくれたら、私のことなど思い出してくれなくっていいんです。むしろ忘れてくれたらうれしいとさえ思います。

ただ今皆様の大切なお子さまを皆様のお手元にお返しいたします。離しがたい、離がたい気持ちいっぱいをこらえながら、どうかお幸せに。卒業生の皆さん、いよいよ別れの時が近づきました。最後に私の大切な教え子である一人一人の皆さんに願いを込めて次の言葉を贈ります。

【254人の若人よ。別れに君たちに 餓^{はなむけ}る短い言葉、それは「小さい勇気をこそ」の一言。

覚えていてくれその言葉。人生の大嵐がやってきた時、それがへっちゃらで、それを乗り越えていてくれるような「大きい勇気」も持つてほしいが、私は「小さい勇気こそ」がほしい。君たちの大切な仕事を後回しにさせ、忘れさせようとする小さい悪魔が、テレビやスリルドラマや漫画に化けて君を誘惑する時、すぐそれをやっつけてくれるくらいの「小さな勇気」でいいから、それを持ってほしい。

そういう「小さい勇気」をバカにしていては、いざという時に、「大きい勇気」もつかめないのではないか。明日があるではないか、明日やればいいではないかと、今夜はもう寝ろよと、机の下からささやきかける「小さな悪魔」をやっつけてしまうほどの、「小さい勇気」を持ってほしい。

どんな苦難も乗り越えられる、「大きい勇気」もほしいにもほしいが、毎日小出しに使えるような、「小さい勇気」でいいから、それを君たちはたくさん持ってほしい。そういう「小さい勇気」をバカにしていては、いざという時の「大きな勇気」もつかめないのでないだろうか。】

さあ行け、私の教え子たち。

式場の皆さん、この私の教え子達の旅立ちに、大きな、大きな拍手を贈ってやってください。

—拍手—

卒業生の皆さん今の拍手が響きましたか、君たちの胸に…。

卒業生の皆さん、無い物ねだりはやめるんだよ。

君たちの中にあるもの、そして、君たちの中にあるものを大きく育てながら、君たちの中にはないものはどうする。自分たちの手でつくりだしていくんだ。ないものは自分たちの力でつくりだしていくんだ。全力をかたむけてこそ道が開ける。若人よ、君たちは私の教え子、飛べないはずはない。

さあ、旅立て明日に向かって。明日に向かって大きく羽ばたけ。

鳴島第一中学校長 佐藤 文彦



1984年7月 佐藤文彦先生（前・中央）於・京都



1991年8月 板野中学校3年B組代表
於・佐藤文彦先生宅